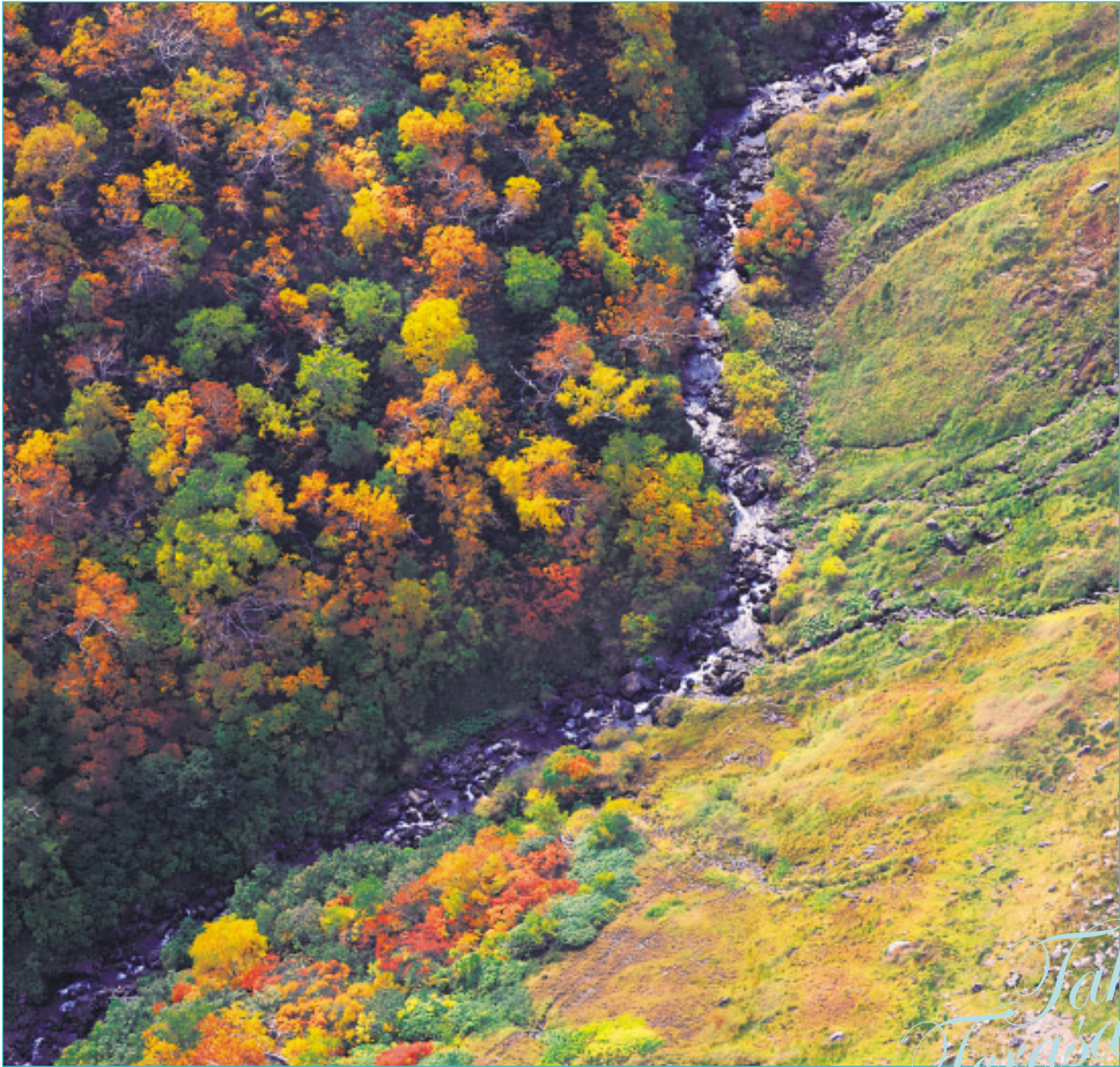


寺沢孝毅の
自然迫写 1

北の大地で
なものが
つなぐ命

森から川へ、そして海へ——守りたい生態系がここにある



大雪山の紅葉

大雪山の山々を空から見下ろしたことがある。標高の高いところの樹木が、紅葉の佳境を迎えようとしていた。山頂のガレ場を少し下ったところに、空の光を反射させる銀の流れがあった。山岳地帯の栄養を海まで運ぶ毛細血管として、わたしの目に映った。

色付いた木の葉は、間もなくひらりと地面に降り積もる。やがてバクテリアに分解され、養分として土へと返っていく枯れ葉。命を閉じた動物も、朽ちることと地面に同化してゆく。山々に降った雨や雪が、命が形を変えたそれらの栄養分を低い方へと運び、やがて海へと到達させる。小さな沢や、それが合流する河川は、まさに血管そのものの役目を果たしているのだ。

北海道の屋根
大雪山
銀色の流れが
命をつなぐ
山の恵みを運ぶ川

北海道や海外の自然を被写体に撮影活動을 続けている寺沢孝毅氏。ファインダーを通して見つめてきた変化をフォトエッセイでつづります。

Takaki Terasawa



寺沢孝毅
写真・文

てらさわ たかき
写真家。1960年士別市生まれ。北海道教育大学卒業。82年より天売島に住み、ウミガラス（オロロン鳥）などの海鳥の保護活動を開始。ロシア、アラスカ、カナダ、北極圏などをフィールドに取材を行っている。99年、天売島海鳥情報センター「海の宇宙館」開設。2006年、環境省主催の「全国野鳥保護の集い」（東京日比谷公会堂）で日本鳥類保護連盟会長賞。最近の著書は「天を売る島」（柏書房）、「知床のアザラシ」（小学館）。